



あべ じゅんいち
阿部 純一さん

より良い未来を築くために――

阿部さんは宮城県仙台市で運転代行業を営んでいました。宮城野区にあった会社は事務所や車が津波ですべて流されてしまい、地元で再生するか、新たな土地でやり直すかとても悩んでいたそうです。そんな中、度重なる余震で当時2歳のお子さんの体調が崩れてしまい、家族の健康を考えて2011年6月11日に札幌市へ移住されました。

「本当に移住を決めるまでは深く悩みました。会社はようやく軌道に乗っていて、業務拡張する寸前でしたからね。会社、原発事故、余震、とこれからのことを悩んでいたら、震災前はとても元気だった息子が寝込んでしまったんですよ。私も余震が来るたびに恐怖心が募り、大きな余震が来たときにはもう限界を感じてしまいました。安心しながら生活したいと思い、仙台を離れることにしました。生まれも育ちも仙台でしたので、ふるさとを離れるのは正直、辛かったです。

妻の実家が小樽市ということもあり、移住先は札幌市に決めました。仕事を探すときに、避難者です、とはあえて言いませんでした。差別されるのではないかと抵抗があったからです。話の中で聞かれた時だけ話していたくらいです。

現在も被災者としての住宅支援は受けていませんが、引っ越してきたときに区役所の方が、ハローワークで職を探す間の家賃が補助される『住宅支援給付』という制度を教えてくださいました。職が見つかるまで給付金を受けることができ、とても助かりました。そんな感じでしたので、避難者さんとのつながりは全くない状態でした。」

阿部さんは現在、運転代行業を営む会社で正社員として勤務しています。人手不足でとても忙しいそうです。

「毎日、受注の電話から配車指示など一人でこなさねばならない業務が山盛りです。人手不足が深刻で、廃業した会社もあるそうです。

そんな風に忙しく仕事をしていたある日、当社の代行を利用してくださった方がみちのく会の方で、世間話から避難されたということを知り、偶然繋がることができました。人との縁って不思議だなって思います。



当時2歳だったお子さんも来春は小学生。札幌に引っ越してからは体調も良くなり、元気いっぱいやんちゃとのこと。

今まであえて避難者宣言をしてこなかったものの、みちのくに繋がれたことは正直、うれしかったです。人それぞれ避難したことへの思いや問題点は異なるでしょうが、理解しあえることも多いですからね。

札幌に来てから、息子はすぐに元気に戻り、全くじっとしていませんね。汗だくになって走り回る姿を見ていると、札幌に来て本当に良かったなあと思います。」

現在は深夜勤務の阿部さんは、将来的に日中でできる仕事で起業したいと考えているそうです。

「震災前、妻はインテリアコーディネーターとして長年勤務していました。札幌に来てから一度だけ、建設会社へ勧めたのですが、子どもを預けて、片道1時間の通勤時間。保育園などを支払うとお給料はわずかしかなかった、それならば専業主婦の方がいいと思い辞めてしまいました。資格を活かせないのはもったいないことだと思っています。

私は運転代行業なので、勤務時間は深夜です。年齢や体力的なこともあり、限界が来る前にそろそろ日中の仕事にシフトせねば…と考えています。就職というよりは、何か起業したいと思っています。

あれこれと思案中なのですが、そのうちの一つは、女性にとってお子さんがいても働きやすい環境づくりに役立てるような業

種です。妻の立場で考えて、こういうのがあればいいな、が仕事になりますよね。

あとは、妻の資格を活かせるようなことです。中古マンションのリノベーションとか。その時は私は営業に徹します(笑)。

よく見渡してみると、運転代行業に限らず、人手不足の業種はたくさんあります。需要に対して供給が間に合わない部分もかなりあると思います。世の中の需要と供給の動向を見つ、自分のやりたいこと、人の役に立つことを加味しながら実現させたいです。人から『ありがとう』と言ってもらえるような仕事をを目指したいです。

東日本大震災から4年目ですが、今もある震災がなければ…と悔やむ時はあります。自分で会社を一から立ち上げ、やっつ、ある程度の形となり、これから大きくしていこうという矢先でしたから、正直、本当に悔しいです。

先日、一時帰郷で会社があった場所に行ってみました。見事に何もありませんでした。そこに町があったのに残ったのは更地だけ、です。なんにもないんですよ。

でも、過去を振り返って落ち込んでばかりいても、流されたものが戻ってくるわけはありません。過去よりも今がいいと言えるように、できる限り前を向いて未来を築いていきたいです。」

阿部さん、お忙しい中ありがとうございました。